

医療系情報演習におけるBYOD 環境の課題と展望

田中 雅章
Email: tanaka@yuai.ac.jp
愛知医療学院大学

◎Key Words:情報リテラシー, 情報機器, ノートパソコン

1 はじめに

本校ではコロナ禍になるまで、情報処理演習室のノートパソコンを使用した情報リテラシー演習が行われていた。しかし、非常事態宣言や蔓延防止の発令で、通常の対面授業が不可能となり、オンライン授業に切り替わった。従って、学生が所有するパソコンを使うことになり、コロナ規制が解除されても学生のパソコンで情報処理演習を継続している。大学におけるBYOD方式の導入は、全ての普通教室でPCが使える柔軟な学習環境を実現した。学校は情報処理演習室を普通教室へ転換することで教室不足が解消され、PCの購入コストや維持管理コストが削減できるメリットがある。その一方で、ネットワーク環境を強化するコストが必要になる。

BYODは学生が所有するPCの性能差など、いくつかの問題点も存在する。本校のような医療系養成課程においては、セキュリティ面への配慮が重要で、Wi-FiのESSIDはステルスになっている。さらにパスワードは半年ごとに変更する運用である。また、ウィルス対策は学生の責任をもって対策ソフトをインストールするように指導している。これらの指導は入学前教育で実施している。

2 BYOD機器のばらつき

入学予定者へ学校があっせんする機器の案内や自宅にあるPCを使用する場合は表1 PC必要スペックのように明示している。

OS	Windows11またはWindows10
Office	Office2021またはOffice2019
プロセッサ	Core i3以上
メモリー	8ギガバイト (GB)以上
ストレージ	256ギガバイト (GB)以上

表1 PC必要スペック

ところが、いざ情報処理演習が始まると学生は高校時代に使い慣れた機器や販売店で強く勧められた機器を持ち込むことがあった。演習ではWindows系の機を基本として指導している。そのため、MacやChromebookでは、指導者から指示されたとおりに学生が操作しても同じ結果が得られないことがある。学生は思い通りの結果が得られないときは、混乱することになり指導者1人でその対処は不可能である。

学生にしてみれば、高校時代に使い慣れた機器が優先され、大学でも使い慣れた機器を使いたいという気持ちも理

解できる。しかし、一般社会ではWindows機が主流であり、デザイン系などの特別な業種を除けば、在学中はWindows機が使えないと勉学に支障をきたす。

3 ノートパソコンのキーボード問題

同じWindows機でもメーカーやモデルによってキーボード問題がある。デスクトップのキーボードはJISで規定されているため、メーカーによる違いはほとんどない。しかし、ノートパソコンのキーボードは、メーカーやモデルによって様々な違いがある。この違いは、操作性や快適性に影響を与えるだけでなく、情報処理演習では混乱を引き起こす。

例えば、あるノートパソコンでは、ファンクションキーを単体で押すと画面の明るさ調整などのシステム機能が働いてしまい、意図せずWord文書のフォントサイズが変わってしまうといった操作トラブルが発生することがあった。また、Excelの絶対参照を設定する際に、ファンクションキーの組み合わせが必要な場合、他のノートパソコンとは異なる操作が必要となり、作業効率が低下するケースもあった。写真1にキーボード配列例を示す。



写真1 キーボード配列例

左側のPCは、「fnキー」を押しながら対象となるキーと組み合わせることで、F1～F12として動作する。

右側のPCは、「fnキー」を押して、ランプを点灯させる。その時に、F1～F12として動作する。しかし、「fnキー」のランプが明るい部屋では状態がわかりづらい。

4 まとめ

以前は情報演習の担当者が非常勤であったため、BYODの情報蓄積がなかった。医療系養成校で、情報処理は一般教養の一つであるため、学生に携帯させるPCのメーカーや機種を統一することを強く推進できない。今年のBYODの経験を来年に生かし、情報処理演習を円滑に実施したいと考えている。